晴れの水無月に手向け花

文鳥

枯らしてしまったの、赤い唇がわなないた。
何を、僕は問うた。恋を、彼女が答えた。

青い影が斑に落ちる石段をゆっくりと登る。蟀谷から額に流れる汗を手の甲で拭った。足が鉛のように重くて、ともすれば爪先が段差に引っ掛かりそうになる。ぬるい空気はいくら呼吸しても息苦しさは増すばかりで、どうにも胸が詰まった。
からんからん。
突然鈴の音が降って来て、思わず顔を挙げた。気力を振り絞って、残りの数段を一気に駆け上がる。パッと視界が開けて、光が目の前を染めあげた。梅雨の晴れ間の陽光は、いとも容易く世界を灼く。今からこれでは夏本番はいかほどか。未だチラチラと光の粒が瞬く視界に古びた、けれど存在感のある朱色が映る。最後の一段を蹴った勢いのまま、聳え立つ鳥居をくぐり抜けた。

背負っていたリュックから水筒を取り出して、蓋を開け、冷えた麦茶を熱い体に流し込んだ。鮮やかな緑の葉を鳴らす木々に囲まれたこの場所は、頭上に広がる澄んだ青のおかげか不思議と窮屈さを感じない。少し肺が落ち着きを取り戻すのを見計らい、スケッチブックを取り出そうとして、鈴の音が聞こえたことを思い出す。参拝客だろうか。こんなところに？来るのが大変だからか、祭りの時でさえ人っ子一人いないというのに。
からんからん。
再び鈴の音が響いた。その引力に誘われて視線を左に向ける。そこには鳥居と揃いの朱色に塗られたお社が慎ましく建っている。その前に人影を見止めて、目を見開く。艶々とした長い黒髪が印象的な若い女性だ。顔は見えないが、髪から覗く頬が、合わせられた手が、サンダルを履いた素足が、纏うワンピースに負けないくらい白い。角膜も網膜も突き破って脳に焼き付く強烈なコントラストだった。見たところ荷物は小さな肩掛け鞄だけだ。参拝するだけならそう時間はかからないだろう。この人がここにいる限り、スケッチブックと色鉛筆の出番はやってこない。それなのにがらんどうの境内を想像すると、汗ばむくらいの晴天の下だというのに酷く寒々しい気がした。女性が社殿に背を向けて歩き出す。そこでふと気が付く。境内を出るために彼女はこちらに来るのでは？どっと引いたはずの汗が噴き出した。やはり地球の気温は年々上昇しているようだ。だって、こんなにも暑い。全身を巡る血液が沸騰しているみたいに、心臓が小さな太陽になったみたいに。けれど、幼稚な思考と裏腹に、彼女は目の前を通り過ぎた。呆気にとられながらもその

背を目で追って気が付く。お社の反対側の木々が途切れ、僕のすぐ後ろにあるものよりも心持ち大きな鳥居が立っていた。そして、朱色のフレームの向こう側に光を乱反射する青い海が見えた。そうだ。鳥居とお社は普通ならば参道で結ばれているはずだ。大きな神社と違って玉砂利や石畳が敷かれているわけではないとはいえ、正門とでも呼ぶべきそれに気が付かなかったのは、ここを見つけた時が夜だったからだろう。祭りの喧騒が遠ざかるなか、高台を探して弱気を殺しながら辿り着いた先が、ぐるりと影に囲まれていた時の落胆といったら。目当ての花火の代わりに満点の星に照らされて藍を刷かれたお社の冴えた美しさは夏の盛りにあっても背筋を凍らせるほどで、何かに追い立てられるように石段を駆け下りたのだ。彼女は鳥居をくぐって境内から出ると、鞄から素麺みたいな白い紐の束を取り出して、そのうちの一本を折り曲げた。紐はもうほとんど折られていて、真っ直ぐなものは二、三十本しか残っていない。彼女は紐をしまうと鳥居に向き直り、腰を折って深々と頭を下げた。そして、またもや境内に足を踏み入れた。スッと背筋が伸びて、しなやかな足が一歩ずつ見えない参道の端を踏んでいく。そして社殿に辿り着くと、鈴を鳴らして、二礼二拍手一礼してから、初めに見たのと同じように手を合わせた。そしてまた、鳥居の外に出て、紐を折り、また礼をして、お社に向かう。何度も。何度も。動画を延々と再生し続けるみたいに。その横顔に焦りは見えないが、歩を緩めることもない。黒い瞳が凛と前だけを見つめている。気がつくと僕はしゃがみこんで、色鉛筆とスケッチブックを手にしていた。彼女が振り子のように繰り返すのを眺めては、顔を伏せてスケッチブックに視線を落とす。色鉛筆を紙面に走らせては別の色を重ねていく。黒々と光る瓦屋根を掲げた朱色のお社は一際鮮烈に、陰影を意識して濃淡をつけた緑や紺を背景に敷いて、下部には平らかな茶色を、上部には目に沁みるくらいの青を置く。そうして描きあがった絵を見た途端、失敗に気がついて思わず声を零しそうになった。紙面の中のお社の前に長い黒髪の参拝客が描き込まれている。やってしまった。描くのは風景だけのつもりだったのに。

「絵を描いているの？」

「は……」

鈴を転がすような声が降ってきた。反射的に顔をあげると、いつの間にか彼女が目の前で膝に手を当てて身を屈めていた。最近はとんと縁がなかった晴れ空の眩しさに思わず目を細める。逆光で暗くなっていても、相対する顔が笑んでいるのがわかった。

「急に声を掛けてごめんなさい。邪魔しちゃったわね」

「あ……いえ、あの、いいんですか」

「ん？」

「お参り、もういいのかなって」

後から悔いると書いて後悔。口をついた言葉を彼女は逃してはくれなくて、うろうろと視線を彷徨わせながら続きを声にした。こんなのはずっと見ていたと白状しているようなものだ。彼女は目を丸くしてぱちりと瞬かせたあと、花が綻ぶように微笑んだ。

「ええ、百回お参りし終わったから」

特に気分を害した風でもなくて、胸をなでおろす。それと同時に百回もお参りしたのかと驚いた。手水舎さえない小さな神社であっても、百回も参拝するのは骨が折れるだろうに、そうまでして叶えたい願いなんて想像もつかない。彼女がしゃがみこみ、顔がはっきり見えた。白磁の肌に、黒い髪、服装も相まって色に乏しい容姿の中で、赤い唇がやけに目を惹く。なぜだか見てはいけないものを見たような気がして目を逸らしてしまった。昔に読んだ童話に出てきた白雪姫はこのような容姿をしているのだろうか。

「なんで、そんなに」

居心地の悪さを何とかしたくて口にした言葉があまりに野暮だと遅れて気づく。今日はこんなことばっかりだ。調子が狂う。ここに来てから。――彼女を見てから。

「どうしても、叶えたいことがあって」

「叶えて欲しい、じゃなくて？」

「そう」

これはお願いというよりも決意表明なのだと、アーモンド形の目を縁取る長い睫毛が伏せられた。

「枯らしてしまったから、水を遣りに行くの」

「枯らしてしまったって、なにを」

既に枯れているなら水をやったところでと思わないでもなかったが、口を噤む。彼女は微笑みを浮かべたまま、眉を下げた。僕の知る限り、一等綺麗で寂しい笑い方だった。

「恋を」

一瞬震えた唇が動くさまが不思議なくらいにはっきり見えて、紡がれた声が妙に耳に残った。彼女が右手の薬指をもう片方の手で握るのを見て、そこに光る銀色に気がついた。

「頷くだけでよかったのに、もったいぶったせいであの人は私の答えを知らないの。だから今度は私から逢いに行くのよ」

水を遣っても蘇らないかもしれない。それでも、神様相手に百回宣誓するほどの熱量を冷ます言葉と資格を僕は持たない。梅雨時なのに雲一つない空からは雨の一粒も落ちてこない。指輪をなぞる手つきがあまりに優しげで、それを見つめる瞳がどうしようもなく愛おしげで、頭のどこかが急速に冷えていくのが分かった。

「そうなん、ですか」

「ええ、そういえば、坊やは絵を描くのが好きなの？」

「あ、いや別に。ただ、夏休みの図工の宿題が毎年同じ

だから今のうちに終わらせちゃおうと思って」
今描いても夏の盛りに描いてもわかるまい。そんな浅い知恵を得意げに言う気にはなれなくて、語尾が少し小さくなる。
「へえ、名案ね」
僕の思いを知ってか知らずか、思いがけず彼女はころころと笑った。浮かべた笑みはこれまでに見たどれとも違って悪戯っ子のようで、抗う間もなく目を奪われる。
「よかったら見せてくれない？」
スケッチブックを持つ手に力が入った。後ろ姿とはいえ許可なく描いた姿をよりによって本人に見せていいものか。けれど、わざとではないとはいえ一方的に踏み込み過ぎた自覚があった。何より、光を弾く黒曜石の瞳に見つめられてしまえばもうお終いだった。
「どうぞ、あの」
渡す瞬間、耐えきれずに目を伏せた。彼女が「あら」と小さく声を漏らすのが聞こえた。
「これ、わたし？」
呟いた声が存外あどけなくて変に心臓が跳ねた。
「ごめんなさい、勝手に」
「いいのよ、ずっとお参りしていたから邪魔だったでしょう」
「いえっあのっ」
気ばかり急いて、思ったよりも大きな声が出た。
「邪魔なんかじゃ、なかったです。全然」
「そう？ならよかった。絵、上手ね」
彼女が触れるか触れないかの距離で紙面を指先で撫でた。
「ありがとう、ございます」
顔が火を噴きそうなくらい熱かった。特別絵が下手だとも思っていないが、けして上手いわけでもない。季節の分かりやすいものを描かなければ何の温度も伝わらない。そんな絵だ。それなのに、そんなことないと言えなかったのは、胸に撒かれた何かのせいだ。彼女の声を聞くたびに根を張り、笑いかけられるたびに芽を伸ばす何かのせいだ。そうこうしているうちに、聞きなれた音楽が鼓膜を揺らす。そうだった。夏の空は嘘を吐く。時間を忘れさせて、いつまでも夜が来ないような顔をする。
「六時だ。帰らなきゃ」
「まあ、もうそんな時間。私も帰らなくちゃ、気をつけてね」
「お姉さんも」
彼女が正門から出ていくのを眺めていた。石段を下りるたびに黒髪が揺れて、海中に歩いていくように、鳥居の向こうに消えて行った。一人になった境内は想像よりもずっと空っぽで、来た時と同じ鳥居を抜けて石段を駆け下りる。行きよりもずっと楽なはずなのに、心臓がやけにうるさかった。

いつも通りの朝だった。起きてから玄関を出るまでの微睡みの延長戦だった。机の上のスケッチブックが証明してくれなければ、昨日の出会いの全てを夢だと思っていたかもしれない。階段を下りて、先に朝食を食べていた父と台所にいた母に挨拶をする。
「おはよう」
「おはよう」
「おはよう、やっと起きたのね。ほら、早くご飯食べちゃいなさい」
「はーい」
小さくあくびをして食卓につく。手を合わせてから、母が用意してくれたトーストをかじろうとして、何気なくテレビに目をやって、呼吸が、止まった。
「は」
何の変哲もないニュース番組、真面目な顔をした男性キャスターが落ち着いた声で話しているのと同じ画面に、彼女が映っていた。死亡、調査中、海、耳から入ってきた単語がぐるぐると頭の中で回っていた。
「怖いなあ。あそこだろ町の外れの、前にも誰か亡くなった」
一人で行くんじゃないぞと言う父の声がどこか遠く聞こえる。味のわからないトーストを飲み込みながら、そういえば彼女は返事をしていないと言っていたのに、なぜ指輪を持っていたのだろうかと回らない頭で思っていた。

ひとつも授業に集中できないまま迎えた放課後に僕は図書館に来ていた。そこで読んだ新聞で、あの海で男性が一人亡くなっていたことを知る。日付はちょうど一年前の昨日だ。気がつけば、いつの間に帰路についていたのか僕は自室の机の前に座っていた。
「神前式、かあ」
立てかけていたスケッチブックがこちらに向けているのは昨日描いたばかりの絵だ。誰に聞かせるわけでもない呟きが、さっきまではっきりしていたはずの視界が、海の中にいるみたいにゆらゆら揺れている。決意表明というよりも宣戦布告だったのかもしれない。指輪を撫でる彼女の笑顔を思い出す。神頼みなんてとんでもない。証人どころか目撃者にして、見せつけるように逢いに行ったのだ。ジューンブライドはウエディングドレスの印象が強くて、白無垢とは少しミスマッチな気がするけれど、ジューンブライドも白無垢も、彼女にはきっとどちらも良く似合う。だって、六月の不意を突いた青空も、風になびく白色も、彼女には良く似合っていた。

次の晴れの日にまたあの神社に行かなくては。提出用に絵をもう一枚描かなくてはいけない。ああでも、きっと視界の端に、あの白色を探してしまう。鼓膜の奥に、あの声が染みついている。彼女を真似て百回、神様にお願いしてみるのもいいかもしれない。でも、欲を言うならば、神様じゃなくて彼女に持っていってほしかった。胸に芽生えた想いを道連れにしてほしかった。

「おめでとう、お幸せに」

ぽたぽたと顎を伝って落ちた雫は、渡す先を失ってなお枯れてくれない初恋への遣水だった。